

令和元年度 **国** **語** (50分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
- 2 この問題冊子は29ページである。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始の合図前に、監督者の指示に従って、解答用紙の該当欄に以下の内容をそれぞれ正しく記入し、マークすること。
 - ・①氏名欄
氏名を記入すること。
 - ・②受験番号、③生年月日、④受験地欄
受験番号、生年月日を記入し、さらにマーク欄に受験番号(数字)、生年月日(年号・数字)、受験地をマークすること。
- 4 受験番号、生年月日、受験地が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークすること。例えば、

10

と表示のある解答番号に対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の②にマークすること。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
10	①	②	③	④	⑤

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってよい。

国語

解答番号

1

24

1

次の問1～問7に答えよ。

問1

(ア)、(イ)の傍線部に当たる漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は

1

2

。

(ア) 水は植物にとって必要フカケツだ。

1

- ① 完全ムケツな人間はいない。
- ② 反対多数でヒケツされた。
- ③ 当然のキケツだ。
- ④ 自らボケツを掘った。
- ⑤ 彼は天下のゴウケツだ。

(イ) 部屋のカンキが必要だ。

2

- ① 驚きのカンセイがあがる。
- ② カンレイ前線が通過する。
- ③ 新入社員のカンゲイ会を開く。
- ④ 試験カントクをする。
- ⑤ 当たりくじを景品とコウカンする。

問2 傍線部の漢字の読みとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 3。

祖父の愛惜していた万年筆をもらう。

- ① あいしやく
② あいじよう
③ あいよう
④ あいこう
⑤ あいせき

問3 「的中」の「中」と同じ意味で用いられているものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 4。

- ① 中立
② 中流
③ 胸中
④ 命中
⑤ 連中

問4 次の傍線部と同じ意味であるものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

5。

迷子になってしまったペットを手を尽くして探す。

- ① 二手に分かれて流れていく川。
- ② 働き手が足りない。
- ③ 劣勢を挽回するには、これより他に手が無い。
- ④ 平仮名は昔、女手とも言われた。
- ⑤ 鍋の取っ手を持つ。

問5 「君子危うきに近寄らず」と対照的な意味合いで用いられる言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6。

- ① 君子は豹ひょう変へんす
- ② 虎穴に入らずんば虎子を得ず
- ③ 羊頭やうとうを懸くけて狗肉くわにくを売る
- ④ 二兎とを追う者は一兎をも得ず
- ⑤ 鶏口けいこうとなるも牛後ぎうごとなるなかれ

問6

空欄

A

B

に入る語句の組合せとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7

「潜在」は「表面にあらわれず、ひそみかくれていること」という意味の熟語である。「潜」が「ひそみ、かくれる」という意味を表している。これに対し、「」「」という意味の「」を用いた「在」がその対義語である。

① A おもいのままにあらわれる

B 自

② A そとがわにあらわれる

B 外

③ A はつきりとおもてにあらわれる

B 顕

④ A あるがままのすがたがあらわれる

B 現

⑤ A あちこちにひろがってあらわれる

B 散

問7

傍線部と文法的な説明が同じ「そうだ」を含むものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8

もうすぐ北海道行きの船が出るそうだ。

① 今度のキャンプは楽しそうだ。

② サークスが街に来るそうだ。

③ 今にも雨が降りそうだ。

④ そうだ、それで大丈夫だ。

⑤ ライオンが今にも吠えそうだ。

2

須原さんは、国語総合の授業の「地域に残る伝承を記録しよう」という単元で、地元の人たちに話を聞き、レポートにまとめることになった。須原さんが地域の人たちからそれぞれ【聞いた話】と、それをもとに書いた【聞き取りメモ】を読んで、問1～問3に答えよ。

【聞いた話】



私が司書をしている市の図書館に、『落合の伝説』という本があったね。蛇石の伝承が載っているわよ。確か、ある武士が村を苦しめる大蛇を退治しようとしたら、大蛇が、助けてくれたら村を日照りから守ると言って、蛇石に姿を変えたって話だったわよね。「蛇石神社縁起」が引用されていて、この日照りから守ってくれる蛇石に感謝して毎年お祭りが開催されると書いてあったわ。この地では本当に日照りが起きていないのよ。(図書館司書 42歳)



私はこの地域の歴史を研究しているものだがね、源某（なにかし）という武士の大蛇退治は平安の終わり頃と言われているが、文献に出てくるのは江戸の初め頃なんだ。ただ、祭りや神楽（かぐら）がいつ頃から始まったのかはわかっていない。蛇石神社の社史をみてもそのへんがはっきりしないんだよ。神楽は市の重要無形文化財に指定されているんだが、もっと調査が必要だね。同じ日市の早川地区にも同じく源某という武士に関する言い伝えがあったね。今はそれとの関連を調べているところなんだ。(郷土史家 66歳)



今年は僕が武士役だったんだ。祭りは七月中旬でしょ。でも練習は五月の半ばから始まるんだ。週に三回、夜、コミュニティセンターに舞手の十二人が集まって練習するんだけど、大変だったなあ。本番は緊張したけど、大蛇に刀を突きつけるシーンで、観客から「エイヤ」の声がかかると、やっぱりうれしかったよ。(中学生 14歳)



今年は私も祭りに駆り出されたよ。もう若者っていう年でもないけどね。初日の夜、かがり火がたかれる中、八人の若者たちが沼に入る。そんなに深くはないんだけど、それでも腰までつかるよ。そして沼の主に感謝して、みんなで沼の真ん中にある蛇石に供物をささげるんだ。身が引き締まる思いだったね。(自営業 38歳)



わしは毎年、中学生たちに神楽の指導をしておるが、今年の舞手はなかなかよくやってくれたな。祭りの二日目は天気もよくてよかった。武士と大蛇の戦いの場面は何度見てもいいのお。さすがに蛇石祭は市の観光の目玉だね。毎年たくさんのお客さんが県外からも来てくれて大賑わいさ。やっぱり、あの幻想的な風景がいいんだよなあ。なんと言っても県の指定文化財なのだから、未来に伝えていかななくては。まだまだ引退はできんなあ。(無職 72歳)

神社の隣にある沼の真ん中に蛇の頭のような石が出ているのを知っていますか。あれが蛇石ですよ。昔父から聞いたのはね、蛇石祭は、この地域を水害から守ってくださっている蛇石様に感謝して、毎年七月に二日間、蛇石神社で行われるということですよ。今年は十四日の土曜日からの二日間でしたね。(無職 75歳)

〈概要に関すること〉

- ・ 蛇石のある沼のすぐ隣にほこらが建てられ、現在の蛇石神社となっている。
- ・ 私の住む、H市落合地区には、A 蛇石と言われる岩があり、それにまつわる言い伝えや祭りが残っている。

〈伝承に関すること〉

- ・ B 平安時代の終わり頃、源某という武士がこの地を通りかかったときに、村人たちが沼に住む大蛇に悩まされているという話を聞き、大蛇退治に向かった。果たして、沼の中から大きな蛇が現れ、武士を飲み込もうとした。武士は持っていた刀を大蛇に突きつけた。大蛇はそこで、自分は沼の主だと語り、もし命を助けてくれたならば、この村を守ろうと約束する。武士が承知すると、大蛇は蛇の形の石に姿を変え、以後、この地には日照りが起きなくなった。（『落合の伝説』より）

〈祭りに関すること〉

- ・ 蛇石神社では、毎年、C 7月の中旬に蛇石祭を行う。
- ・ 祭りの起源には諸説あるが、「蛇石神社縁起」によれば、X に感謝し、行われるようになったという。
- ・ 祭りの見所は、初日の夜にかがり火をたいて、地域の D 若者たちが一斉に沼に入り、蛇石の上に供物を供える場面である。幻想的な風景に、毎年多くの観光客が見学に訪れ、市の観光の目玉となっている。

〈神楽に関すること〉

- ・ 祭りの最終日には、武士と大蛇の戦いの場面を再現した神楽が奉納される。
- ・ 地区の中学生の中から武士役と大蛇役が選ばれ、Y か月間の練習に取り組んだ後、蛇石神社の境内に作られた舞台で、総勢 Z 人の中学生たちが舞を奉納する。
- ・ クライマックスは、武士が大蛇に刀を突き立てる場面で、見物客たちからも大きな「エイヤ」の掛け声がかかる。
- ・ この神楽は E 県の重要無形文化財 に指定されている。

参考文献 相川哲夫『落合の伝説』（19△△年、郷土××社）

問1 【聞き取りメモ】内の〈祭りに関すること〉についての記述の空欄 に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 。

- ① この地を悩ませた大蛇を貫いた剣
- ② この地を悩ませた大蛇を退治した武士
- ③ この地を荒らした大蛇を封じている沼の主
- ④ この地を日照りから守ってくれる蛇石
- ⑤ この地を水害から守ってくれた蛇石

問2 【聞き取りメモ】内の〈神楽に関すること〉についての記述の空欄 ・ に入る数字の組合せとして正しいものを、次の①～⑤の

うちから一つ選べ。解答番号は 。

- | | | | | |
|-------|-------|-------|--------|--------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| Y 3 | Y 2 | Y 3 | Y 4 | Y 2 |
| Z 6 | Z 8 | Z 2 | Z 10 | Z 12 |

問3

須原さんは【聞き取りメモ】と【聞いた話】の内容の一部に一致しない点があることに気がついた。この点をメモに反映させるにはどうしたらよいか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 下線部Aに関して、蛇石のある場所が聞く人によって微妙に食い違っていたため、現地でもう一度確認し、【聞き取りメモ】を書き直す。
- ② 下線部Bに関して、起源については伝承が平安末期という説と江戸時代という説があるため、【聞き取りメモ】には「平安時代の終わり頃（一説に江戸時代）」と二つの説を入れる。
- ③ 下線部Cに関して、祭りの開催時期については証言に言い回しの違いがあるため、わかりやすく七月十四日から二日間と【聞き取りメモ】を書き直す。
- ④ 下線部Dに関して、蛇石に供物を供えるのは、中学生たちであるとの証言もあったため、「若者たち」を「若者たち(中学生)」と【聞き取りメモ】を書き直す。
- ⑤ 下線部Eに関して、神楽の文化財指定については、市の重要無形文化財と言う人と県の指定文化財と言う人がいたため、きちんと確かめた上で【聞き取りメモ】を書き直す。

3

第一高校では例年生徒会主催行事(合唱コンクール、文化祭、体育祭)を実施している。しかし来年七月から三月にかけて、校舎の大規模な改修工事が予定されており、工事期間中は校舎と校庭の利用が制限される。そのため、生徒会主催行事を一つだけ選び、工事が始まる前に実施することになった。第一高校新聞部ではこの件について特集記事を組むことになり、「合唱コンクール希望」「文化祭希望」「体育祭希望」それぞれの立場から、意見を寄稿してもらうことになった。

「文化祭希望」の立場から新聞に寄稿することになった河野さんは、次の【手順】を経て、【意見文の下書き】を書いた。これらを読んで、問1、問2に答えよ。

【手順】

- i 文化祭をやりたいと思う理由を付箋に書く。
- ii 付箋を、内容のまとまりごとにわけて模造紙に貼る。

【意見文の下書き】

1

1

6

は形式段落の番号を表す。

1 来年に行う生徒会主催行事は、文化祭がいい。そう考える理由は三つある。

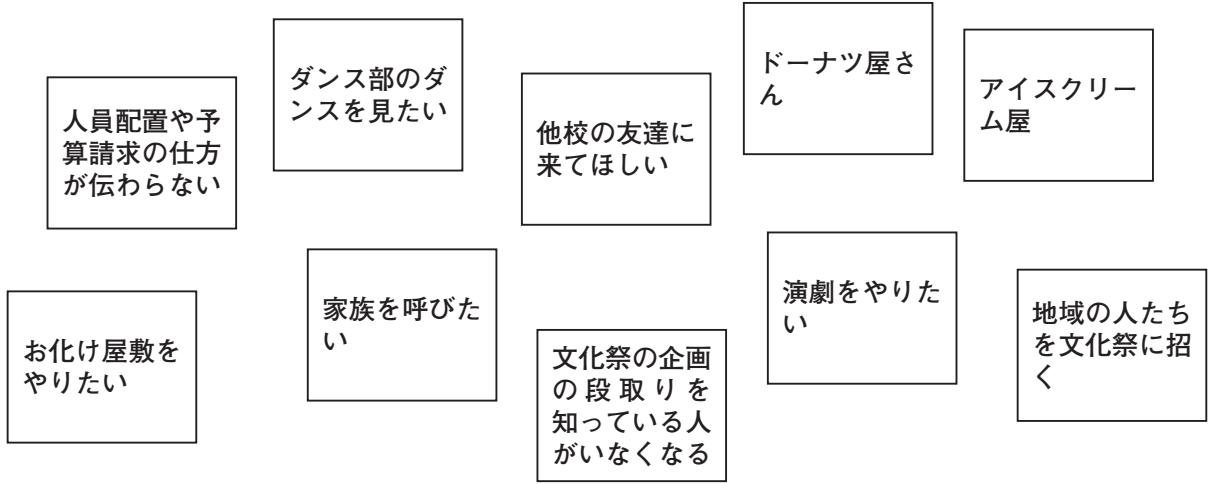
2 第一に、文化祭を通して、たくさん思い出づくりができるということだ。もちろん、合唱コンクールや体育祭でも思い出づくりはできる。しかし、文化祭ではクラスや部活動ごとに、研究展示、アトラクション、模擬店、パフォーマンスといった様々な催しがあり、生徒一人一人がいくつもの企画に関わるため、それぞれの企画ごとに思い出ができる。合唱コンクールや体育祭とは違い、文化祭では、多彩な思い出づくりができるのだと考える。

3 第二に、文化祭を運営するノウハウの継承ということがある。新聞部が発行した校内新聞でも指摘されていたが、文化祭が一年間中断するということは、文化祭の運営・参加に関するノウハウの引継ぎが一年途切れるということだ。文化祭は、合唱コンクールや体育祭と比べると、運営・参加に関わる生徒の人数は圧倒的に多い。そのことを考えると、文化祭の運営・参加のノウハウを継承していくためにも、実施すべきは文化祭であると考ええる。

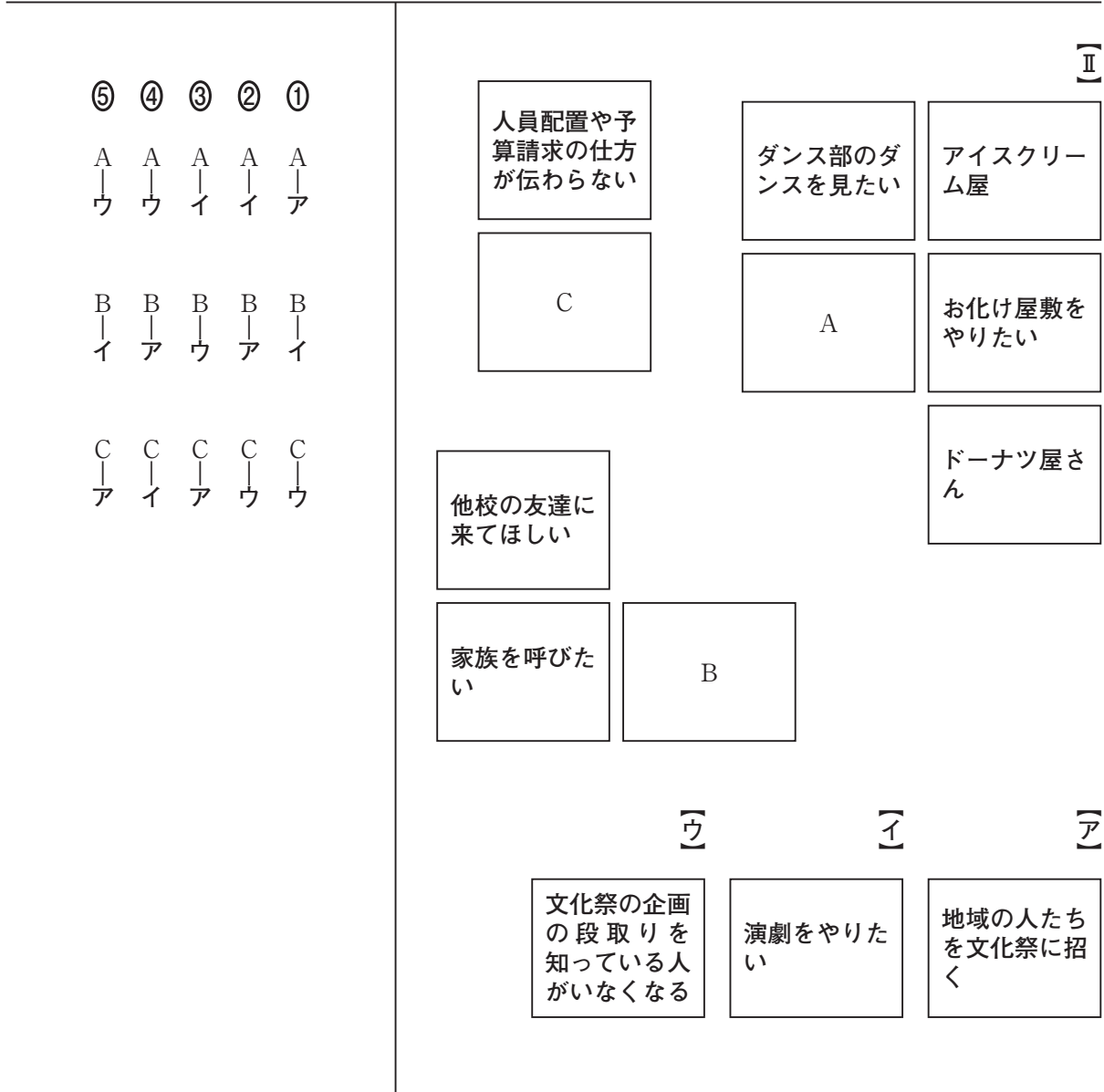
- 4 第三に、第一高校を地域に知ってもらう機会を確保したいということだ。第一高校では、合唱コンクールや体育祭は非公開であるが、文化祭は地域の人々に公開される。私たちの保護者や友達だけでなく、地域の住民の方をはじめ、第一高校に関心があるすべての人に、私たちの活動をみていただくことができる機会となる。私たちの学校のことを広く知っていただく機会は、ぜひとも確保しておきたい。
- 5 たしかに、文化祭は、合唱コンクールや体育祭と比べると、運営のための費用が桁違いにかかる。
- 6 このようなことから、私たちは、来年の七月に実施する生徒会主催行事は文化祭がいいと考えている。

問1 次にあげる【I】は、【手順】iで河野さんが書いた付箋である。河野さんは、この【I】の付箋を【手順】iiで、【II】のように整理・分類した。河野さんは【II】のA～Cに残りの付箋【ア】～【ウ】をどのように分類したと考えられるか。その組合せとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

【I】



【II】



問2 河野さんが書いた【意見文の下書き】の中には説明が不足している部分がある。論旨を明快にするためには、どこに、どのような内容を入れたら

よいか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① の冒頭に、友達から聞き取ってまとめた文化祭に関する思い出を入れる。
- ② で述べていた校内新聞の記事を参考資料として 6 の文の後に入れる。
- ③ の文の後に、費用がかかってもやはり文化祭を実施したいと考える理由を入れる。
- ④ の文の後に、行事の運営・参加の引継ぎがなされなかった場合に生じる問題点を具体的にあげる。
- ⑤ の文の後に、文化祭をやりたいと考える三つの理由をもう一度まとめて入れる。

4

次の文章を読んで、問1～問6に答えよ。

長次郎の「楽茶碗」に出会ったのは京都の楽美術館である。その衝撃は今でもくっきりと脳裏に刻まれている。黒くて丸みを帯びた茶碗の魅力に吸い寄せられ、展示台のガラスケースが鼻息で曇るほど見つめてしまった。まるで全ての意味やエネルギーを吸い込んで黙するかのような無光沢のかたまり。膨張・拡大するのが宇宙なら、同じ宇宙を凝縮へと向かわせると、こんな風になるかもしれない。形は簡潔だが、これは「シンプル」とは呼べない。合理性では到達できない、別の美意識がそこに息づいている。

シンプルという概念は、権力と深く結びついた複雑な紋様を近代の合理性が超克していく中に生まれてきたという経緯を前節で述べた。しかしながら、日本文化の美意識の真ん中あたりにある「簡素さ」は、シンプルと同じ道筋をたどって生まれてきたものではない。シンプルな誕生は百五十年ほど前であると述べたが、日本の歴史を振り返ると、そのさらに数百年前に、「シンプル」と呼びたくなる、簡潔に極まった造形が随所に発見できる。その典型がこの長次郎の楽茶碗であり、また、今日の和室の源流といわれている、京都慈照寺に残されている足利義政の書院「同仁齋」である。それらは、複雑さと対峙する簡潔さの中に力をたたえているが、シンプルとは本質的に異なっている。あえて言うなら「エンプティ」つまり空っぽなのである。その簡潔さはかたちの合理性を追求した成果でもなければ偶然の産物でもない。「何も無い」ということが意識化され、意図されている。空っぽの器であることによって、人の関心を引き込んでしまう求心力として「エンプティネス」は体得され、運用されていたのだ。

日本の美意識は資源であり、積極的に活用されるべきだとすると、その一端がどのような経緯で生まれてきたのかを理解していくことは重要である。ここでは少し、自分の体験をふまえつつ「エンプティネス」誕生の周辺について話してみようと思う。

楽茶碗と出会ったのは、京都の茶室で広告の撮影をしていた時だった。慈照寺東求堂「同仁齋」、大徳寺玉林院「蓑庵」、武者小路千家「官休庵」など、国宝重文級の茶室でロケを行っていた。それらの空間に直に身を置くことで、そこで運用されている美意識が、デザイナーとしての現在の自分の感覚とつながっていることに気がついたのである。特に、足利義政がその晩年を過ごした京都・東山の慈照寺、通称銀閣寺東求堂の書院「同仁齋」で、僕は大きな覚醒と手応えを得ることができた。

足利義政が東山で隠居生活を始めたのは室町末期、十五世紀の末であるから、今から五百年以上も前のことである。その東山文化を茶の湯を通して

洗練させていった千利休が活躍した桃山時代は十六世紀の後半で、これはバウハウスの誕生より三百年以上も前のことである。^(注1)

簡素を旨とする美意識の系譜は世界でも珍しい。なぜなら、世界は力の表象のせめぎ合いで複雑さに輝いてきたからである。複雑さを脱して、簡素さへと意識を移していく背景には相応の理由があるはずだが、その理由はおそらくは応仁の乱という大きな文化財の焼失が京都を襲ったことに起因するのだろうと考えている。

足利義政は室町幕府八代目の將軍であるが、その政治力の欠如、治世への情熱の希薄さは様々な文献で語られるとおりである。普請好き美術好きで、世が傾くほどに美に耽溺したという。もしもこの人が、精力的に世を治め、後継問題もきちんと差配して家族をまとめていけば世は乱れず、応仁の乱も起きずにすんだかもしれない。しかしながら不思議なもので、將軍義政のふがいない政治力から、世が紛糾し大きな戦争が引き起こされたことで、日本の文化はひと皮むけて、独創性へと歩を進めることができたのである。

応仁の乱の経緯についてここで語るのは控えるが、室町幕府という力の弱体化を象徴する想像を超えた大きな戦争であった。約十年間を通して、歴史の超過密集積地であった京都を襲った戦乱の炎は、壊滅的な文化的損傷を当時の日本に与えたのである。

第二次大戦の戦火を逃れた京都であるから、年配の京都人が「先の戦争で」というと応仁の乱のことである。そういわれると戦争も雅に聞こえるから不思議であるが、戦争は戦争。破壊の本質は変わらない。B29の焼夷弾で焼き尽くされた東京と同じく、室町末期の京都も、十年を超える戦乱によって、その大半を焼失した。焼夷弾と違うのは、破壊や略奪などの人災がそれに輪をかけたことだ。皇居や將軍・貴族の邸宅にまで破壊・略奪は及んだという。伽藍も仏像も、建築も庭も、絵巻や書物、着物や織物に至るまで、破壊されうる夥しい文化財がこの際に失われた。蓄積されてきた日本文化が一度完全にリセットされるほどのダメージがそこに生じたのである。

義政は、数百メートル先に戦乱が迫っていても、なお書画にうつつを抜かしていたと言われるほどの、アンバランスに美に耽溺した人であったようだが、逆にそれだけに、戦乱によって失われた文化財の巨大さを、人一倍認識できたはずである。古美術商が見たら腰を抜かすほどの、超下級の喪失を経て戦争は終わる。義政は結局、息子に家督を譲って東山に隱遁するが、そうなくてもまだ、普請道楽や芸術への耽溺は止まらず、現在の慈照寺のある場所に、趣向を凝らした東山御殿を築くのである。そして皮肉なことに、ここに全く新しい日本の感受性が開花していくのだ。

足利義政が東山に築いた東山御殿は、いわば、義政が練りに練った美意識の集大成であった。応仁の乱の直後のことであるから、予算的にはさぞや逼迫していたであろうと想像されるが、義政とはそういうことを理由に何かを儉約するような人ではない。世や民のことはさておき、あり得るだけの予算を投入して、自分の晩年の居場所を構築したのである。

しかしながら、そこに現れた表現は決して豪華なものではなく、簡潔・質素をたたえる美であった。敷き詰められた四畳半の畳。外光をなめらかな間接光へと濾過する障子。たおやかな紙の張りをたたえる襖。書き物をする帖台と飾り棚が一面にびしりと端正に収まり、帖台の正面の障子を開けると、庭の光景が掛け軸のようなプロポーションで切り取られて眼前に現れる。まるで数学の定理のように美しい。義政はつましく謹慎するためにこのような表現を選んだのではない。おそらくは権力の頂点で美を探求し、さらに応仁の乱の壮絶な喪失を経ることによって、何か新しい感性のよりどころを掴んだのであろう。

それまでの日本の美術・調度は決して簡素なものではなかった。ユーラシア大陸の東の端に位置する日本は、世界のあらゆる文化の影響を受けとめてきた。世界の末端で、各地の強大な力が生み出す絢爛たる表象物の伝来をほしきままにし、「唐物」と呼ばれる渡来品に魅了されながら、日本は案外と絢爛豪華な文化の様相を呈してきていたはずである。仏教の伝来やそれに起因する仏教文化の隆盛、大仏の開眼法会に象徴される壮麗華美な文化イベントなどはその象徴だろう。渡来ものの装飾の精緻さや珍しさを尊び、そこから多くを学び吸収して日本文化は織り上げられてきていたはずだ。

それらの文物を集積してきたメトロポリス京都の焼失を目の当たりにした人々の胸に、どのようなイメージが渦巻き、どのような達観が生成したかは今日知るよしもない。しかしおそらくは、華美な装飾のデテイルをなぞり直し復元するのではなく、むしろ究極のプレーン、零度の極まりをもって絢爛さに拮抗する全く新しい美意識の高まりがそこに生まれてきたのではないか。渡来の豪華さの対極に、冷え枯れた素の極点を拮抗させてみることで、これまでにない感覚の高揚を得ることができたのではないか。そんな風に想像することができる。

なにもないこと、すなわち「エンプティネス」の運用がこうして始まる。そういう美学上の止揚あるいは革命が、応仁の乱を経た日本の感覚世界に沸き起こったのである。

茶を喫する習慣は世界中にある。温かく香りの良い茶を飲むという行為や時間の持ち方は、普遍的な生の喜びに通じているのだろう。この「茶を供し、喫する」という普遍を介して、多様なイマジネーションの交感をはかるのが室町後期にその源流を持つ「茶の湯」である。誤解を恐れずに言えば、茶を飲むというのはひとつの口実あるいは契機にすぎない。空っぽの茶室を人の感情やイメージを盛り込むことのできる「エンプティネス」として運用し、茶を楽しむための最小限のしつらいで豊かな想像力を喚起していく。水盤に水を張り、桜の花弁をその上に散らし浮かべたしつらいを通して、亭主と客があたかも満開の桜の木の下に座っているような幻想を共有する、あるいは供される水菓子の風情に夏の情感を託し、涼を分かち合うイメージの交感などにこそ、茶の湯の醍醐味がある。そこに起動しているのはイメージの再現ではなく、むしろその抑制や不在性によって受け手に積極的なイメージの補完をうながす「見立て」の創造力である。

エンプティネスの視点に立つなら「裸の王様」の寓話は逆の意味に読みかえられる。子供の目には裸に見える王に着衣を見立てていくイマジネーション

ンこそ、茶の湯にとつての創造だからである。裸の王様は確信に満ちて「エンプティ」をまもっている。何もないからあらゆる見立てを受け入れることができるのだ。

空間にぼつりと余白と緊張を生み出す「生け花」も、自然と人為の境界に人の感情を呼び入れる「庭」も同様である。これらに共通する感覚の緊張は、「空白」がイメージを誘いだし、人の意識をそこに引き入れようとする力学に由来する。茶室でのロケーションは、その力が強く作用する場を訪ねて歩く経験であり、これによって、現代の僕らの感覚の基層にも通じる美の水脈、感性の根を確かめることができた。西洋のモダニズムやシンプルを理解しつつも、何かが違うと感じていた謎がここで解けたのである。

楽美術館での長次郎の楽茶碗との出会いはその締めくくりであった。一連の撮影を終えて立ち寄った美術館に、全てを凝縮するようなオブジェクトが並んでいたのである。

(原研哉『日本のデザイン——美意識がつくる未来』による。)

(注1) 千利休——安土桃山時代の茶人。堺の商人の家に生まれ、茶人として織田氏・豊臣氏に仕えた。

(注2) バウハウス——二十世紀初期にドイツに設立された造形学校。

(注3) 止揚——矛盾・対立する二つの概念を、その矛盾・対立を保ちながらより高次の段階で統一すること。

(注4) 亭主——茶会を主催する人。

(注5) 「裸の王様」の寓話——何も着ていないのに、目に見えない服を着せられていると思ひ込んでいた王様が、子供から、王様は裸だと言われ

て初めて自分の本当の姿に気づいたという寓話。「寓話」は教訓などを他の事柄に託して語る物語のこと。

問1 傍線部A 形は簡潔だが、これは「シンプル」とは呼べない。とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 長次郎の「楽茶碗」が簡潔な印象を与えるのは無光沢な表面の部分に限られているので、「シンプル」という言葉では説明できない。
- ② 長次郎の「楽茶碗」は合理性を追求した結果として簡潔な形になったわけではないので、「シンプル」という言葉では説明できない。
- ③ 長次郎の「楽茶碗」には権力と結びついた複雑さを打破しようとする力強さがないので、「シンプル」という言葉では説明できない。
- ④ 長次郎の「楽茶碗」からは偶然が生み出した無意識の美を感じ取ることができないので、「シンプル」という言葉では説明できない。
- ⑤ 長次郎の「楽茶碗」にはまだ人々の心を引き寄せるだけの求心力が備わっていないので、「シンプル」という言葉では説明できない。

問2 傍線部B 簡素を旨とする美意識の系譜は世界でも珍しい。なぜなら、世界は力の表象のせめぎ合いで複雑さに輝いてきたからである。とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 権力者は、豪華で贅を尽くした文物を生み出すことで自分の力の強さを内外に示そうとするために、その対極にある美意識は生まれにくいということ。
- ② 有史以来、種々の争いにおいて複雑で微妙な力関係が働くことで世界の秩序が保たれてきたために、同じ次元で美意識を語ることはできないということ。
- ③ 日本には大陸からもたらされた絢爛で壮麗な美意識が根底にあり、京都という場所は、応仁の乱を経てなおその美意識の極致を体現しているということ。
- ④ 権力者は自分の後継者候補を何人も用意することで、手にした権力の維持を図ろうとするために、美意識もそれを反映して複雑なものになるということ。
- ⑤ 複雑な数学の定理や医療技術が現代の高度な文明を作ってきた過去があるために、それまで培ってきた美意識をもう手放すことができないということ。

問3 傍線部C 皮肉なことに とあるが、どのようなことが「皮肉」なのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 複雑な美を享受しようとしたあまり、人生の大半を無駄に過ごしてしまった義政が、晩年になって初めて自分の求めていた美を見出せたということ。
- ② 美に傾倒しすぎたゆえに、国が滅びるほどのダメージを負ってしまったが、政治から離れることによって義政はかえって思い通りの暮らしができたということ。
- ③ 政治的な意識の低さや能力の欠如は容認されるものではないが、その義政が招いた世の乱れからかえって複雑で華麗な美意識の伝統が芽生えたこと。
- ④ 戦争により文化の継承に困難が生じるほど文化財が失われたが、その原因となった義政のもとで新たな美意識が生まれ、また別な伝統が作られたこと。
- ⑤ 渡来してきた複雑な美に拮抗しうる日本独自の美意識を生み出したかった義政が、戦乱で文化財を失ったことによってその夢をかなえられなかったこと。

問4 傍線部D 裸の王様は確信に満ちて「エンブテイ」をまとっている。 とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 「裸の王様」は、あらゆる可能性を追求するためには、常識にとらわれない発想力が必要だと考えているということ。
- ② 「裸の王様」は、自分の姿が裸にしか見えないのは、見る人が精神的にはまだ子供だからだと思っているということ。
- ③ 「裸の王様」は、あえて何も着ないことによって、さまざまな姿を人々に想像できるようにうながしているということ。
- ④ 「裸の王様」は、わざと注目を浴びるようになかったころをして、人々にその理由を考えさせようとしているということ。
- ⑤ 「裸の王様」は、たとえ何も着ていなくても、王としての権威にはいささかも傷がつかないと信じているということ。

問5 傍線部E 感覚の緊張 とあるが、それがどこから来ると述べられているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① イメージの欠落が人を不安に陥れるところ。
- ② 何もない空間が人の想像力を刺激するところ。
- ③ 境界の不明確な場所が人の関心を引くところ。
- ④ 解釈の難しい問題が人を混乱させるところ。
- ⑤ 潜在意識が人の価値観に影響を与えるところ。

問6 この文章の内容について述べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 足利義政の政治力と美意識を例に挙げ、為政者の美への情熱が希薄であったばかりに世が乱れて大きな戦乱が起こり、夥しい文化財の損失に結びついてしまったと論じている。
- ② 世界中に存在する茶を喫する習慣を例に挙げ、華美な装飾や豪華な渡来品に囲まれることが芸術や文化を楽しむ醍醐味であり、普遍的な生の喜びに通じていることを述べている。
- ③ 足利義政が築いた東山御殿を例に挙げ、戦乱により喪失した絢爛豪華な表現の復元を目指したが条件が整わず、結果としてつつまじやかでたおやかな美意識が生み出されたと述べている。
- ④ 日本文化は古来世界のあらゆる文化の影響を受けて成熟してきたが、応仁の乱以後は渡来品の流入が止まり、その結果として独自性の強い東山文化が生まれたと述べている。
- ⑤ 日本文化の美意識が独自のものだということを東山文化の例などを通して確認し、そしてその美意識の象徴的な存在が楽茶碗であることを述べて文章を締めくくっている。

5

次の文章を読んで、問1～問4に答えよ。

浜田長八には二人の娘がいた。姉は幼なじみの平次と婚約したが、戦乱のため居所を離れた平次から五年間も音沙汰のないまま病死してしまった。やがて平次は戻ってきたが、ある日妹が平次を訪ねて来て、結婚を迫った。平次は親の許しのない結婚はできないと断るが、その氣迫に押されて承諾してしまった。その後、妹と一緒に家を離れるように願い出て、二人はそのまま一年ほど身を隠していた。しかし、妹は親に許しを乞いたいと言い出し、舟で故郷に戻って来た。そして、平次は浜田家を訪れ、これまでの経緯を告げて、謝罪した。

浜田聞きて、「それはいかなる御事ぞ。更に心得がたし」といふ。平次ありのままにかたりて、真紅の帯を取り出してみせたり。その時浜田大いに驚き、「この帯はそのかみ姉に約束せし時に給はりし物なり。姉むなしくなりければ、棺におさめてうづみ侍り。又妹は病おもく、床にふしてあり。君とつれて他国にゆくべき事なし」とて、「舟にとどめおきたり」といふをききて、人をつかはしてみするに、舟にはふなかたの外は更に人なし。「これはそもいかなる事ぞ」とて浜田夫婦は驚き、うたがふところに、妹の娘そのまま床より立ちあがりて、さまざま口ばしりて、「我すでに平次に約束ありながら、世をはやうせしかば、おくり捨てられて、塚の主となされしかども、平次にふかきすぐせの縁あり。この故に今又ここに来れり。ねがはくは我が妹をもつて、平次が妻となしてたべ。^(注3) 然らば日比の病もいゆべし。これみづからの心に望むところなり。もしこの事をかなへ給はずは、妹が命をもおなじ道にひきとりて、我が黄泉の友とせむ」といふ。家うちの人みな驚きあやしみて、その身をみれば妹の娘にして、その身のあつかひ、ものいふ声ことばは、みな姉の娘にすこしもたがはず。父の浜田いふやう、「汝はすでに死したり。^C いかでかその跡までも執心ふかくは思ふぞや」と。物の氣こたへていふやう、「みづから先世に深き縁ある故に、命こそみじかけれども閻魔王にいとまを給はり、この一年あまりのちぎりをなし侍り。今は迷塗にかへり侍る。必ず、みづからがいふ事たがへ給ふな」とて、平次が手をとり、涙をながし、いとまごひして、又手を合はせ、父母をおがみつ、さていふやうは、「かまへて平次の妻となるとも、女の道よくまもり、父母にかうかうせよや、今はこれまで」とて、わなわなとふるひて地にたふれて死に入りたり。人々驚き容に水そそぎければ、妹よみがへり、病はたちまちにいえたり。先の事どもをとひけるに、ひとつもおぼえたる事なし。これによりてつひに妹の娘をもつて、平次と夫婦になしつづ、さまざま仏事をいとなみ、姉の娘が跡をとぶらひ侍り。^(注4) これを聞く人きどくのため

しに思ひけり。

『伽婢子』による。

(注1) ふなかた——船頭。

(注2) すぐせの縁——前世からの宿縁。後の「先世」も前世のこと。

(注3) 黄泉——冥土(死者の住む国)へ行く道。後の「迷塗」も同じ。「閻魔大王」は、死者の世界を支配している。

(注4) きどく——不思議なこと。

問1 傍線部A 大いに驚き とあるが、浜田が驚いたのはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

20

- ① 浜田が結婚祝いとして姉に与えた帯は姉の死後に棺に入れたものだから。
- ② 平次が婚約の際に姉に贈った帯は姉の死後に一緒に埋葬したものだから。
- ③ 姉の形見の帯は自宅で病氣療養している妹が身につけているはずだから。
- ④ 姉が愛用していた帯は遺言に従って浜田が大切に保管しているものだから。
- ⑤ 姉が妹の病氣平癒を願って与えた帯は病床の妹が身につけているはずだから。

問2 傍線部B 舟にはふなかたの外は更に人なし・傍線部D 妹よみがへり とあるが、この二つの表現から読み取れることの説明として最も適当

なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 平次はうそをついてまで妹との結婚を認めさせようとしたが、姉も二人の結婚を望んだために恨みが晴れて妹の病気が治ったということ。
- ② 平次は姉の魂が取りついた妹の肉体と暮らしていたに過ぎず、自分の願いがかなわないと知った姉の魂は妹の肉体から離れたということ。
- ③ 平次と一緒にいた妹は平次の見た幻影に過ぎなかったが、死んだ姉の願いがかなえられた後には誰の目にも見えるようになったということ。
- ④ 平次と暮らしていた妹は平次にしか見えておらず、死んだ姉の魂が自分の願いをかなえるために妹の姿を借りてこの世に現れたということ。
- ⑤ 平次は浜田をだまして怒りを静めようとしたが、浜田が結婚を許すと一年余り冥界をさまよっていた妹の魂が肉体に戻ったということ。

問3 傍線部C いかでかその跡までも執心ふかくは思ふぞや とあるが、娘の思いを表したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちか

ら一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 平次と妹は前世から結婚できない運命ではあったが、閻魔王の許可を得られたので、妹の病気が全快したならば二人を結婚させてほしい。
- ② 平次と妹は前世からの深い因縁で結ばれているので、妹は重い病気ではあるけれど、わずかな時間でも平次と結婚生活を送らせてあげたい。
- ③ 平次と自分は前世から結婚する運命であったが、平次が妹を妻にしようとしているので、もし二人の結婚を許せば妹も冥土に連れていこう。
- ④ 平次と自分は前世から結婚できない運命であり、今は自分の魂が妹の肉体に宿っているが、運命とは無関係な妹との結婚を認めてほしい。
- ⑤ 平次と自分は前世からの深い因縁で結ばれていたが、自分の死によって結婚ができなくなったので、せめて妹との結婚を許してもらいたい。

問4

星野さんのクラスでは、本文を読んだ後、次の【資料】と読み比べ、班で話し合う学習を行った。なお、この【資料】は本文の話のもとになったとされる漢文である。後の【話合いの一部】は、その時の様子である。これらを読んで、(1)・(2)に答えよ。

【資料】

防禦聞之、驚曰、「吾女臥病在床、今及一歲、饘粥不進、轉側須人、豈有是事耶。」生謂其恐為門戸之辱、故飾詞以拒之、乃曰、「目今慶娘在於舟中、可令人昇取之來。」防禦雖不信、然且令家僮馳往視之、至則無所見。

この後、姉の霊が父に崔生と慶娘とが結婚できるように懇願した。父は姉をきつく問い詰めたが、切なる思いを知って二人の結婚を許すことにした。そして、姉は最後に語った。

「父母許我矣。汝好做嬌容、慎無以新人而忘故人上。也。」言訖、慟哭而仆於地。視之、死矣。急以湯藥灌之、移時乃甦、疾病已去、行動如常。問其前事、並不知之、殆如夢覺。遂涓吉、續崔生之婚。

〔崔生は、姉の思いに感動し、道士に頼んで壇を設け、三日三晩祈禱して冥福を祈った。〕

復見^{マタ}二夢^{あらはレテ}於生^ニ曰^{ハク}、「蒙^{カウ}二君^ニ薦^ガ拔^(注9)、尚^{ナホ}有^リ二余^ニ情^ヲ。雖^モ隔^{ツト}二幽^ニ明^ヲ、実^{マコト}深^ク感^{カン}佩^(注11)。小妹^ハ柔和^{ナレバ}、宜^{ヨウ}シク善^ク視^ル之^ヲ。」生^ニ驚^キ悼^シ而^{シテ}覺^ム。従^{ヨリ}此^{コレ}遂^ニ絶^ユ。嗚^ア呼^ア、異^{ナル}哉^{カナ}。

(『剪灯新話』による。)

(注1) 防禦——官名。ここでは、娘の父親を指す。

(注2) 饘粥——かゆ。

(注3) 生——人名。崔生のこと。

(注4) 目今——現在。

(注5) 慶娘——防禦の娘の名。妹に当たる。

(注6) 昇取——かついで。

(注7) 家僮——召使い。

(注8) 做嬌容——よいお婿さんになってください。

(注9) 薦拔——目をかけること。

(注10) 幽明——冥土と現世。

(注11) 感佩——心に深く感じて忘れないこと。

【話合いの一部】

星野さん 「『伽婢子』は、『剪灯新話』に着想を得て書かれた物語ということね。だから、舞台が日本と中国という違いはあっても内容的にはほとんど同じかしら。」

月岡さん 「そうだね。でも、読み比べてみると、違うところもあるよ。たとえば、平次が娘との経緯を父親に話した場面で、【資料】の文章によ

れば、父親の言うことを、崔生は E と思っているよね。」

日野さん 「たしかに、これは本文（『伽婢子』）の文章には見られなかった描写だね。」

大空さん 「なるほどね。そのまま引き写しただけではないよね。」

月岡さん 「では、今回の学習で本文と【資料】を読み比べて気づいたことを簡単にノートにまとめてみようよ。」

(1) 空欄 E に入る内容として最も適当なものを、次の ①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- ① 親の許しもなく家を飛び出した二人の結婚を認めるのは家の不名誉であり、世間体を気にするあまりうそを言っている
- ② 娘の靈魂がさまよっているという奇妙なうわさが出るのは一家の恥であり、話のつじつまを合わせて事実を隠している
- ③ 娘が重い病気を患っているのは家人以外に知られたくないことであり、妹の病状を悟られないように作り話をしている
- ④ 姉の代わりに妹との結婚をすぐに認めるのは体面に関わることであり、言葉巧みに平次の申し入れを拒もうとしている
- ⑤ 勝手に家を出た娘でも無事に取り戻すのは親の責任であり、調子のいいことを言っておきながら取り入ろうとしている

(2) 傍線部F 今回の学習で本文と【資料】を読み比べて気づいたことを簡単にノートにまとめてみようよ を受けて、自分の考えを書くことになった。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- ① 本文でも【資料】でも妹と結婚した後に姉の供養をしており、その効果があつて姉はこの世への未練がすっかりなくなって妹夫婦の幸せを願いながら去つた点も共通している。
- ② 本文でも【資料】でも妹の肉体を通して姉の思いが語られており、姉の魂が肉体を離れた後では目覚めた妹にその時の記憶がまったくなかった点も共通している。
- ③ 本文でも【資料】でも妹は舟の中っていると男が言っているが、【資料】では父は人に知られるのを嫌って舟に行つて娘を取り戻してくるようにならざるに命じている。
- ④ 本文でも【資料】でも姉の魂が妹に取りついているが、本文では死後もなお妹を思う姉の気持ちが消えないで妹を連れて冥土に行きたいと父に懇願している。
- ⑤ 本文でも【資料】でも男と妹は無事に結婚はできたものの、【資料】では男に未練のある姉によって男も冥界に召されて命を落とすという結末になっている。

